

反応パターンの解釈による

パーソナリティ診断の試み (5)

—CDPA標準化の資料—

続 有 恒 村 上 英 治 水 山 進 吾*
 富 安 芳 和** 荻 野 惺*** 織 田 揮 準****

I 目 的

われわれはこれまでに、臨床的性格適応診断(CDPA)の作成の経過、および、その具体的な資料を報告してきた⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾。ここでは、これまでに報告したもの以外で、今後の展開に必要なと思われる資料をまとめて提示する。

II 資 料

資料I 関連項目の使用頻度、および、逆転タイプにおける項目の対応の検討

各タイプの解釈診断のすすめ方については、すでに詳細に述べたのであるが⁽⁵⁾、その際用いられた関連項目について、さらに次のような資料が得られた。

第4報告⁽⁴⁾において示したタイプ別関連項目の一覧表を、関連項目自体に着目してまとめたのが表1である。I欄の使用頻度は、全256タイプのうちで、関連項目としてとりあげられた頻度を示す。例えば、項目1は、対になった項目のうち、一方のA「旅行の写真を整理するのが楽しい」が選ばれることが多く、しかも、女性に一般的に見られる反応だということを示している。また、項目5は、A「ものごとの計画がたつと『これか、らが自

表 1 関連項目の使用頻度および逆転タイプにおける対応

関連項目 番 号	I 関連項目の使用頻数 (256タイプ中)								II 逆転タイプにおける対応(128対応中)					
	A				B				一 致			逆 転		
	男	女	男女	計	男	女	男女	計	男	女	男女	男	女	男女
1	2	121	43	166										
2	65	1	48	114					16	43	1			
3		1	1	2	1	2		3						
4					3	7	1	11						
5	17	35	102	154					7	20	3			
6	3	14	10	27	1		2	3				1	2	
7					16	18	61	95						
8					109		32	141	15					
9	10	31	40	81					5					
10	15	5	34	54			1	1						1
11					6	28	29	63						
12	8	1	15	24	1	17	5	23				1	6	2
13		1		1	4	5		9						
14	1			1	1	13	3	17						
15	8	55	69	132	1			1		18	2	1		

* 名古屋市立保育短期大学

*** 名城大学

** 金沢大学教育学部

**** 名古屋市立女子短期大学

反応パターンの解釈によるパーソナリティ診断の試み(5)

関連項目 番 号	I 関連項目の使用頻数 (256タイプ中)								II 逆転タイプにおける対応(128対応中)					
	A				B				一 致			逆 転		
	男	女	男女	計	男	女	男女	計	男	女	男女	男	女	男女
16	4	6	2	12										
17	5	7	5	17	2	6	8	16				1	2	4
18						99	73	172	45	1				
19	2	12	21	35										
20	5	29	10	44					1					
21	3	3	1	7										
22					7			7						
23		31		31	12		1	13						
24					5	4	3	12						
25	2			2	1	16		17						
26	5	42	32	79					4					
27	3	1	10	14		1		1						
28	5	33	28	66					2					
29	2	15	2	19	1			1						
30		6		6	3			3						
31					3	14	5	22						
32	4			4		50		50						
33	9			9		35		35						
34					19	1	114	134	8	2				
35		8		8	3			3						
36	5	16	17	38					2					
37	1	29	11	41	16	1	14	31				1	5	6
38		9	2	11	10	2	11	23					2	
39	3	1		4		10		10						
40						1		1						
41	31		9	40		4		4						
42	1	56	38	95					4					
43	2			2	2	9		11						
44	1			1		1		1						
45	1	3	2	6	2	1		3						
46	19		3	22		1		1	1					
47		35		35	11			11						
48	14	15	9	38										
49	11	6	5	22										
50	12	4	43	59		3		3					3	
51	1			1		29	2	31	2					
52					18	1	3	22						
53	5	2	2	9		1		1						
54	1	4		5	1			1						
55	1	5	9	15	2	2	6	10					1	3

資 料

関連項目 番 号	I 関連項目の使用頻数 (256タイプ中)							II 逆転タイプにおける対応(128対応中)						
	A				B				一 致			逆 転		
	男	女	男女	計	男	女	男女	計	男	女	男女	男	女	男女
56	30	5	35	70					1					
57	2	7		9										
58		52	13	65					2					
59		2		2	7			7						
60	4	5	6	15	1	1		2				1		
61	1			1		2		2						
62		38	29	67	1			1	2			1		
63	46	1	61	108										
64	1	6	1	8					10		1			
65	6	7	5	18		1	1	2					1	
66		7		7										
67	1	1		2		3		3						
68		4		4	3			3						

分の仕事だ』と思う」反応が、男女を問わず極めて多いことは示している。項目8, 15, 18, 34, 63などが、このような popular な反応として認められるものであり、とくに項目1, 18は女性 popular, 項目2, 8などは男性 popular とみなしうるものであろう。逆に、項目3, 13, 21, 22, 40, 44, 45, 53, 54, 57, 59, 61, 64, 66, 67, 68などは用いられることが極めて稀であり、かなり独自の意味をもった項目であると考え

表 2 逆転タイプ番号別にみた関連項目の対応

I 対応項目が4以上のタイプ対 (N=11)			II 逆転項目が3以上のタイプ対 (N=5)			III 対応項目が0のタイプ対 (N=17)	
タイプ対	各タイプの関連項目総数	対応項目数	タイプ対	各タイプの関連項目総数	逆転項目数	タイプ対	各タイプの関連項目総数
9*—248	14—11	4	34—223	18—11	3	3—254	4—16
21—236	11—12	5	83—174	14—16	3	6—251	6—12
26*—231	14—12	9	91—166	22—14	3	11—246	3—10
29*—228	14—9	4	95—162	18—21	4	16—241	5—12
41*—216	14—12	5	92—165	14—18	3	27—230	6—14
90*—167	19—10	5				47—210*	3—16
100—157*	15—19	4				48—209	5—13
104—153*	8—11	4				49—208	9—10
108—149	9—15	4				64—193	6—10
109—148	13—9	5				65—192	12—7
118—139	15—7	4				75—182	7—13
						78—179	12—6
						82—175	17—7
						96—161	11—20
						97—160	15—6
						103—154*	11—16
						128—129	8—10

(註) ゴチ 60/10,000以上の出現率であることを示す
* 19/10,000以下の出現率であることを示す

反応パターンの解釈によるパーソナリティ診断の試み（5）

ることができる。

このように、項目によって現実にとりあげられる頻度が異なっていることは、やはり各タイプのパターンの解釈をすすめるにあたって十分に考慮されなければならない側面であろう。

次に、第Ⅱ欄に示したのは、主項目において全く逆転したパターンを示すタイプの対における関連項目の対応である。例えば、第1タイプは、主項目にAAAA A AAAとこたえたものであり、その逆転したものはBB BB BBBB、すなわち第256タイプである。^(註1)この主項目のみから考えれば、この対立する2タイプは、全く逆の性格構造を示すかに考えられ、関連項目においても、種々の対立の存在することが予想されるのである。しかるに、第Ⅱ欄におけるように、逆転する関連項目は全体として非常に少ないばかりか、むしろ同一方向の反応が目立ちさえするのである。とくに、こうした一致する方向の項目をみると、主として第Ⅰ欄でみれた極めてpopularな項目である。対応する対が128であることからすれば、そうした事実は当然といえるであろう。

表2は、逆転タイプの対について、関連項目のありかたをみたものであるが、対応する項目の多い対に関しては（第Ⅰ欄）、出現頻度の低いタイプの含まれていることが目立ち、逆転している項目の多いタイプには（第Ⅱ欄）共に出現頻度の高いものが含まれていることが認められる。対応項目の全くみられなかった対（第Ⅲ欄）には、こうした特徴はないが、前2群に比して関連項目数

自体が少ないといった特徴を指摘することはできよう。

具体的な人格像を記述していく上において、われわれはできるだけこうした事実をふまえながら解釈をすすめていったのであるが、今後新たに関連項目の検討を進めていく場合、これらの観点をどのようにとり入れていくかは十分考慮されなくてはならないであろう。すなわちpopular項目や稀にしか出現しない項目が含まれていることの意味、全体の反応パターンの中での位置づけ等を考慮しつつ、関連項目としてどのような性質のものを、どのくらいの割合で含めていくことが、もっとも妥当な人格像を描くことになるかを検討していくことが必要であると考えられる。

資料Ⅱ タイプ毎の10,000人当りの出現頻度

手続については第4報告で述べられている。資料ⅡおよびⅢにおいて示されるものは、第4報告で扱われた対象のうち、中学高校、学年、男女の確認できた29,922名である。その内訳は表3に示した。

附表1は256のタイプ毎に算出した10,000人当りの出現頻度（換算値）である。^(註2)10,000人の1タイプ当りの出現頻度の理論値は39.1人であるが、表4からもうかがえるように標準偏差は中高、男女などにより多少異なる。そこで、便宜的に10,000人当りの出現頻度が平均から1標準偏差以上正の方向にずれた場合を出現頻度の非常に高いタイプと考えその値をゴチック体で、また、1標準偏差以上負の方向にずれたタイプを非常に出現頻度の低いタイプと考えイタリック体で表わした。

表 3 対 象 者 内 訳

性	学校	中			学	高			校
		1年	2年	3年	全	体	1年	2年	3年
男	子	3,969	3,987	4,032	11,988	2,680	2,498	2,394	7,572
女	子	3,706	3,841	3,851	11,398	3,157	3,311	2,496	8,964
全	体	7,675	7,828	7,885	23,386	5,837	5,809	4,890	16,536

註1 タイプ番号が2つあわせて257になるものが逆転タイプの対になる。

註2 学年毎の10,000人当りの出現頻度も算出されているが、本報告では学年別の出現頻度表は割愛する。

資 料

表4 1タイプ当りの出現頻度の度数分布表

10,000人 当りの出 現頻度	中 学			高 校		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体
150~		2			1	
140~149		1	1			1
130~139		3	0	2	2	1
120~129	1	2	4	1	5	2
110~119	2	2	2	5	3	4
100~109	4	4	2	3	3	3
90~ 99	2	2	1	4	3	2
80~ 89	6	5	8	5	6	9
70~ 79	10	7	9	12	13	9
60~ 69	18	15	14	10	14	14
50~ 59	27	22	20	19	21	22
40~ 49	33	25	40	43	20	29
30~ 39	41	45	48	40	35	39
20~ 29	70	50	61	56	56	67
10~ 19	36	65	42	47	55	46
0~ 9	6	6	4	9	19	8
タイプ 数計	256	256	256	256	256	256
1タイプ 当りの 平均出現 頻度	38.5	38.6	39.3	39.7	38.6	39.1
標準偏差	22.0	28.6	24.1	25.4	29.9	25.6

表6 高低出現頻度タイプの反応パターン分析*
(表3参照)

学 校	反 応 パ ター ン カ テ ゴ リ	C D P A 項目番号								
		2	4	6	8	10	12	14	16	
中 学	出現頻度 の高いタ イプ (N=34)	A	19	10	9	24	31	6	7	17
	B	15	24	25	10	3	28	27	17	
学	出現頻度 の低いタ イプ (N=21)	A	15	18	16	8	0	12	19	12
	B	6	3	5	13	21	9	2	9	
高 校	出現頻度 の高いタ イプ (N=41)	A	22	22	19	31	34	3	10	25
	B	19	19	22	10	7	38	31	16	
校	出現頻度 の低いタ イプ (N=28)	A	11	10	14	10	5	26	26	11
	B	7	18	14	18	23	2	2	17	

* 表中のゴチックは、A:B又はB:Aの比が、1:2以上のものである。

表5は中学全体と高校全体の出現頻度の非常に高いタイプおよび低いタイプの番号一覧である。この表から、(1) 中学、高校に共通して出現する出現頻度の高いまたは低いタイプがかなりある(表中のゴチック体のタイプ番号)こと、(2)出現頻度の高いタイプと全く逆の反応パターンをもつタイプが出現頻度の非常に低いタイプのなかにいくつか存在することがわかる。たとえば、中学生の出現頻度の非常に高いタイプ逆転タイプ218が出現頻

表5 出現頻度の高いタイプ低いタイプ一覧(註1)

学 校		タ イ プ 番 号										計
中 学	出現頻度の高いタイプ (N=34)	*39	40	55	67	71	72	83	84	87	88	34
		99	*100	101	102	*103	*104	115	119	*120	165	
高 校	出現頻度の低いタイプ (N=21)	9	*10	13	14	15	*25	*26	29	30	31	21
		41	*57	*58	62	126	*137	*154	*157	201	*218	
中 学	出現頻度の高いタイプ (N=41)	*7	*8	*23	24	35	37	38	*39	*40	*55	41
		69	71	*72	83	87	88	91	95	101	103	
高 校	出現頻度の低いタイプ (N=28)	*104	119	133	134	*135	*136	144	165	166	167	28
		168	174	175	176	*199	215	229	230	*231	*232	
中 学	出現頻度の高いタイプ (N=28)	*25	*26	57	*58	61	62	74	*90	106	*121	28
		*122	137	146	*153	*185	194	201	*202	204	210	
高 校	出現頻度の低いタイプ (N=28)	*217	*218	*234	241	242	*249	*250	252			

(註1) 表中のゴチックは中学、高校に共通して出現頻度の高い、または、低いタイプであることを示す。
出現頻度の高い(低い)タイプとは、そのタイプの出現頻度(f)が次の式を充すものである。
出現頻度の高いタイプは $f \geq m + 1\sigma$
低いタイプは $f \leq m - 1\sigma$
ここでmは平均出現頻度、 σ は標準偏差である。

反応パターンの解釈によるパーソナリティ診断の試み（5）

度の非常に低いタイプとして存在している。表中の印*を付したタイプは出現頻度が非常に高い（低い）タイプであると同時に、その逆転タイプが出現頻度の非常に低い（高い）タイプであることを表わす。

表6は表5に示したタイプの反応パターンの分析結果である。該当するタイプの $\frac{2}{3}$ 以上のタイプに一致のみられるCDPA項目は、中学生の非常に出現頻度の高い34個のタイプでは項目4, 6, 8, 10, 12, 14, 中学生の非常に出現頻度の低い21個のタイプでは項目2, 4, 6, 10, 14であり、その反応は両者の間でA, B逆になっていることがわかる。これは高校生の場合にもあてはまる。

表7 二つのタイプ番号の和が257になる対の出現頻度による分析

二つのタイプの出現頻度の組合せ	中 学	高 校
+	+	5 ^(註i)
+	*	10
+	-	38
*	*	24
*	-	44
-	-	7
計	128 (対)	128 (対)

+は出現頻度が(平均+ $\frac{1}{2}$ 標準偏差)以上,
 *は出現頻度が(平均± $\frac{1}{2}$ 標準偏差)以内,
 -は出現頻度が(平均- $\frac{1}{2}$ 標準偏差)以下であることを示す。
 ++は和が257となるタイプ番号の両者ともその出現頻度が+であることを,
 +*は一方のタイプの出現頻度が+で他が*であることを示す。
 (註i)の数値5は、和が257になる二つのタイプ対の数が、5例存在することを示す。

表7は平均から $\frac{1}{2}$ 標準偏差以上正の方向にずれた出現頻度に+, 負の方向にずれた出現頻度に-記号を付し、反応パターンが相互に逆である二つのタイプの出現頻度を調べたものである。表7によれば、128対の逆転タイプのうち、対の一方の出現頻度が+で他方が-, すなわち、+-の対は中学で38対、高校で30対と非常に多いのに対し、++となる対は中学で5対、高校で3対、また、--となる対は中学7対、高校で6対と少ない。このことは、出現頻度の非常に高いタイプの逆転タイプは、一般的にみて出現頻度が低いといえよう。

資料Ⅲ 10,000人当りの出現頻度の学年、中高別の発達の变化の検討 (x^2 検定)

附表2は中学高校の学年間の出現頻度に関する x^2 検定結果である。

(1)附表のA欄は中学、B欄は高校の男、女、全体毎の

表8 中学、高校間の出現頻度の比較にもとづく反応パターン分析

性別	中学と高校の比較*	反応タイプ数**	反応カテゴリ	CDPA項目番号 ***							
				2	4	6	8	10	12	14	16
男	中学>高校	47	A	18	10	16	13	29	40	23	14
			B	29	37	31	34	18	17	24	33
子	中学<高校	45	A	29	37	30	32	21	5	17	25
			B	16	8	15	13	24	40	28	20
女	中学>高校	34	A	12	5	7	17	29	21	13	18
			B	22	29	27	17	5	13	21	16
子	中学<高校	32	A	23	27	27	22	16	4	13	18
			B	9	5	5	10	16	28	19	14
全	中学>高校	37	A	12	5	9	10	27	32	16	13
			B	25	32	28	27	10	5	21	24
体	中学<高校	32	A	23	27	27	22	16	4	13	18
			B	9	5	5	10	16	28	19	14

* 中学<高校は、出現頻度が中学よりも高校の方が x^2 検定の結果、5%の危険率で多いことを示す。中学>高校は中学<高校の逆である。

** 左の中学と高校の比較の欄に該当するタイプの数である。

*** 該当タイプの反応パターン分析の結果、数値は実数ゴチック体は反応カテゴリAとBへの応答の数が1:2又は2:1以上の項目であることを示す。

学年間の x^2 検定結果である。(註3)

不等号>は10,000人当りの出現頻度が1年 \geq 2年 \geq 3年、<は1年 \leq 2年 \leq 3年、^は1年<2年>3年、Vは1年>2年<3年であるとともに x^2 検定結果が5%以下の危険率で有意であることを表わす。

(2)C欄は、中学高校間の10,000人当りの出現頻度の x^2 検定結果である。不等号>は出現頻度が中学>高校、<は中学<高校であり、5%以下の危険率で有意であることを示す。

(3)D欄の=は中学1年から高校3年までの各学年間の10,000人当りの出現頻度の x^2 検定の結果で、学年間に5%の危険率で有意差のないことを示す。

表8は附表2の「C欄」にもとづき、中学により多く出現するタイプと高校により多く出現するタイプの反応パターンの分析結果である。

註3 計算式 $x^2 = \{(f_1 - n)^2 + (f_2 - n)^2 + (f_3 - n)^2\} / n$
 ここで、 $n = f_1 + f_2 + f_3$, f_i は i 学年の10,000人当りの出現頻度を意味する。

中学男子により多く現われる47個のタイプのCDPA 8項目への反応パターンの分析の結果、 $\frac{2}{3}$ 以上のタイプに共通してみられる反応パターン、いわゆる

中学男子反応パターンは、 $\Delta BBB \quad \Delta A \Delta B$ ^(註4)であり、また、

高校男子反応パターンは、 $\Delta AAA \quad \Delta B \Delta \Delta$ といえよう。なお、 Δ は該当するタイプの $\frac{2}{3}$ 以上の一致のみられなかった項目であることを示す。

同様に

{ 中学女子反応パターンは	$\Delta BBB \Delta$	$A \Delta \Delta \Delta$
{ 高校女子反応パターンは	$AAAA$	$\Delta B \Delta \Delta$
{ 中学生反応パターンは	$BBBB$	$AA \Delta \Delta$
{ 高校生反応パターンは	$AAAA$	$\Delta B \Delta \Delta$

となり、項目4, 6, 8, 12への反応が中・高で異なること、および、その反応は中学がAならば高校はBというように逆になっていることがわかる。

なお、附表2(A, B, C, D欄参照)からわかるように中学1年から高校3年へと学年が進むにつれて、出現頻度が高くなるタイプとしてタイプ6, 32, 38(いずれも男子)があり、逆に高校3年から中学1年へと出現頻度が学年毎に低下するタイプとしてタイプ250(男子)がある。

以上、資料I, 資料II, 資料IIIを中心にして簡単な分析を試みたが、これらの資料がCDPAの使用および今後の展開にあたり何らかの役に立てば幸である。

註4 CDPAの項目番号は、前から順に2, 4, 6, 8, 10, 12, 14, 16である

附記：10,000人当りの出現頻度の算出および χ^2 検定は、すべて当教室の電子計算機NEAC1240によっておこなわれた。プログラムの作成および操作は佐々木雅子氏の援助をおおいだ。記して感謝の意を表す。

文 献

1. 続 有恒, 富安芳和, 荻野 惺, 織田揮準：反応パターンの解釈によるパーソナリティ検査の試み(1) 名古屋大学教育学部紀要——教育心理学科——1967, 14, 71—85
2. 続 有恒, 村上英治, 水山進吾, 富安芳和, 荻野 惺, 織田揮準：反応パターンの解釈によるパーソナリティ検査の試み(2) 名古屋大学教育学部紀要——教育心理学科——1967, 14, 87—110
3. 続 有恒, 村上英治, 水山進吾, 富安芳和, 荻野 惺, 織田揮準：反応パターンの解釈によるパーソナリティ診断の試み(3) 名古屋大学教育学部紀要——教育心理学科——1968, 15, 1—20
4. 続 有恒, 村上英治, 水山進吾, 富安芳和, 荻野 惺, 織田揮準：反応パターンの解釈によるパーソナリティ診断の試み(4) 名古屋大学教育学部紀要——教育心理学科——1968, 15, 21—45
5. 続 有恒編著：臨床的性格適応診断(CDPA) 金子書房 1969

反応パターンの解釈によるパーソナリティ診断の試み(5)

附表1 10,000人当りの出現頻度

タイプ	中 学			高 校			タイプ	中 学			高 校		
	男子	女子	全 体	男子	女子	全 体		男子	女子	全 体	男子	女子	全 体
1	+53	+72	+62	48	+64	+56	-41	-13	-11	-12	-17	-19	-18
2	-14	28	-21	-17	32	25	42	-23	-17	-20	-26	26	26
3	30	+54	42	32	+65	50	43	-25	-13	-19	44	25	33
4	28	32	30	-21	50	37	44	36	-23	30	33	-18	25
5	-16	41	28	36	+76	+57	45	-23	-22	-22	-22	46	35
6	-12	38	-24	33	+71	+54	46	-18	33	-25	-24	39	32
7	-25	+54	39	+58	++115	++89	47	28	-23	-26	48	39	43
8	28	+56	42	+70	++89	++80	48	-27	41	34	44	+54	49
9	-16	-12	-14	-8	-21	-15	49	-27	39	33	-26	39	33
10	-7	-9	-8	-24	-16	-19	50	34	39	36	-18	25	-22
11	-24	-16	-20	-17	-23	-21	51	46	+67	+56	45	50	48
12	-17	-21	-19	-17	32	25	52	+58	39	48	45	31	37
13	-9	-11	-10	-17	27	-22	53	-22	42	32	-25	49	38
14	-11	-18	-15	-15	33	25	54	-24	+53	38	29	39	34
15	-14	-15	-15	40	36	37	55	+51	+88	+69	+63	+71	+68
16	-16	-16	-16	40	51	46	56	45	+54	49	48	+68	+59
17	-23	34	28	33	27	30	57	-15	-11	-13	-5	-6	-5
18	-18	-22	-20	-20	29	25	58	-15	-7	-11	-16	-8	-11
19	+51	+54	+53	48	+74	+62	59	-26	-18	-22	30	-19	-24
20	40	46	43	-25	+57	42	60	29	-15	-22	-20	-20	-20
21	-8	39	-23	-22	36	30	61	-13	-13	-13	-15	-12	-13
22	-13	25	-18	-22	35	29	62	-10	-15	-12	-13	-13	-13
23	40	+67	+53	44	++97	+73	63	-13	-19	-16	40	27	33
24	-24	49	36	41	++86	+65	64	-19	-18	-19	30	25	27
-25	-10	-10	-10	-3	-12	-8	65	28	32	30	-24	-23	-24
-26	-12	-11	-11	-16	-12	-14	66	31	-22	-27	-21	27	-24
27	-21	25	-23	42	32	37	67	+68	+66	+67	+67	51	+59
28	-25	-15	-20	45	28	36	68	48	35	41	30	30	30
-29	-6	-9	-7	-15	-16	-15	69	38	47	42	+59	+70	+65
-30	-8	-10	-9	-20	-19	-19	70	33	39	36	38	49	44
31	-13	-11	-12	46	38	42	71	++74	++97	++85	++90	++116	++104
32	-23	-17	-20	46	44	45	72	++75	+68	+71	++82	+76	+79
33	-27	44	35	37	+56	47	73	29	-11	-21	-18	-21	-20
34	32	40	36	30	+57	45	74	-23	-10	-17	-12	-15	-13
+35	+53	+64	+59	+66	+80	+74	75	46	27	37	48	-23	34
36	+54	+61	+57	40	41	41	76	29	-16	-23	-22	-22	-22
37	30	+80	+54	+74	++123	++100	77	-25	-17	-21	33	-22	27
38	29	++97	+62	++85	++129	++109	78	-26	-17	-21	28	29	28
+39	+59	++105	++82	++119	++126	++123	79	46	28	37	+62	52	+57
+40	+60	++103	++81	++111	++120	++116	80	35	28	32	38	31	34

附表1 (続き)

資

料

タイプ	中 学			高 校		
	男子	女子	全 体	男子	女子	全 体
81	+56	+53	+54	-26	37	32
82	44	29	37	-18	-19	19
83	++124	++110	++117	++86	+60	+72
84	++98	38	+68	41	40	41
85	+55	41	48	40	52	47
86	+53	35	44	34	25	29
87	++104	++137	++120	++133	++131	++132
88	++84	+69	++77	+75	+62	+68
89	28	-17	-23	44	-18	30
90	31	-7	-19	-11	-9	-10
91	++80	26	+54	+75	+68	+71
92	+63	-22	43	46	28	36
93	-21	-13	-17	-26	-18	-22
94	-17	-18	-18	-24	-17	-20
95	+63	37	50	++104	+70	++86
96	+50	31	41	+57	+57	+57
97	39	46	42	-21	27	-24
98	28	33	31	-24	-19	-21
99	++87	+58	+73	+66	48	+56
100	++76	52	+64	44	28	35
101	+54	+75	+65	+73	+75	+74
102	++75	+65	+70	+59	+55	+57
103	++113	++138	++125	++132	++102	++116
104	++87	++100	++93	++102	+67	++83
105	-24	-12	-18	-20	-9	-14
106	31	-11	-21	-13	-11	-12
107	33	33	33	36	-17	25
108	47	-16	32	-26	-18	-22
109	-23	-19	-21	36	28	31
110	32	-24	28	29	26	27
111	44	39	42	++94	39	+64
112	48	34	41	45	44	44
113	48	37	42	-26	-23	25
114	41	32	37	-21	-16	-18
115	++101	+56	++79	+75	44	+58
116	++75	47	+60	34	26	30
117	39	+54	47	41	50	46
118	48	39	43	34	-22	28
119	++101	++107	++104	++123	+78	++99
120	++95	+71	++83	48	+57	53

タイプ	中 学			高 校		
	男子	女子	全 体	男子	女子	全 体
121	-23	-19	-21	-12	-6	-8
122	-23	-10	-17	-7	-6	-6
123	+60	25	43	+54	25	38
124	44	-12	29	36	-11	-22
125	-23	-10	-16	-22	-9	-15
126	-21	-10	-15	-20	-11	-15
127	44	25	35	+62	39	50
128	40	32	36	29	30	30
129	-13	-22	-18	-24	38	31
130	-14	-19	-17	-25	32	29
131	-23	32	-27	-21	30	26
132	-22	40	31	-11	30	-21
133	-17	+59	37	37	++89	+65
134	-23	+69	46	+59	++99	++81
135	-25	+61	43	+54	++105	++82
136	42	+75	+58	+69	++109	++91
137	-18	-12	-15	-13	-15	-14
138	-21	-16	-18	-22	-22	-22
139	-18	-21	-19	32	-22	27
140	35	-24	30	-22	-20	-21
141	-20	27	-24	30	39	35
142	-23	38	30	42	+56	50
143	-23	41	32	38	+55	47
144	33	+53	42	50	+77	+65
145	-16	25	-20	-16	-15	-15
146	-20	-18	-19	-12	-10	-11
147	34	34	34	-12	37	25
148	29	25	-27	-15	-21	-18
149	-16	31	-23	28	52	41
150	-20	32	-26	-18	42	31
151	29	45	37	40	+62	52
152	40	48	44	37	52	45
153	-11	-7	-9	-11	-13	-12
154	-16	-9	-12	-15	-13	-14
155	-19	-22	-21	-24	-20	-22
156	-22	-18	-20	-15	26	-21
157	-8	-14	-11	-18	-16	-17
158	-13	-23	-18	-26	25	25
159	-23	-24	-23	44	27	34
160	28	-23	-26	46	39	42

反応パターンの解釈によるパーソナリティ診断の試み(5)

附表1 (続き)

タイプ	中 学			高 校			タイプ	中 学			高 校		
	男子	女子	全 体	男子	女子	全 体		男子	女子	全 体	男子	女子	全 体
161	-27	44	35	37	+55	47	201	-12	-11	-11	-13	-8	-10
162	39	50	44	49	+65	+57	202	-25	-11	-18	-15	-11	-13
163	+57	+62	+59	+58	46	51	203	-25	-22	-24	30	-16	-22
164	+58	+58	+58	34	40	37	204	39	-18	29	-8	-8	-8
165	+54	++125	++89	++103	++129	++117	205	28	28	28	42	44	43
166	+69	++174	++120	++111	++167	++142	206	38	-22	30	41	-19	29
167	+62	++145	++102	++118	++118	++118	207	43	43	43	+67	35	50
168	++101	++191	++145	++118	++137	++128	208	41	39	40	+70	40	+54
169	-25	25	-25	-25	27	26	209	37	-23	30	-16	-12	-14
170	37	36	36	-24	29	27	210	33	-21	-27	-7	-3	-5
171	48	36	42	38	33	36	211	++73	35	+54	36	-22	28
172	+51	39	45	30	29	30	212	+54	27	41	-18	-15	-16
173	38	42	40	+58	+69	+64	213	40	38	39	37	29	33
174	+59	+75	+67	+65	+79	+73	214	33	37	35	28	-19	-23
175	+55	52	+53	+70	+62	+66	215	+58	+66	+62	+74	+62	+68
176	+66	+81	+73	++94	+78	++85	216	+61	41	51	44	37	40
177	-24	28	-26	-26	-22	24	217	-26	-11	-19	-13	-11	-12
178	30	25	28	-15	-13	-14	218	-20	-11	-15	-9	-7	-8
179	+52	45	48	29	28	28	219	+61	-22	42	45	-16	29
180	39	41	40	32	-19	25	220	45	-22	34	30	-20	25
181	-20	+54	36	-25	35	30	221	-26	-18	-22	30	-19	-24
182	45	+57	51	32	50	42	222	31	-16	-24	33	-10	-21
183	42	+67	+54	52	+69	+61	223	49	25	38	+55	45	50
184	+71	+73	+72	45	+55	50	224	+51	31	41	52	33	42
185	-20	-10	-16	-15	-12	-13	225	30	-23	-27	28	26	27
186	-18	-17	-18	-17	-18	-18	226	40	34	37	30	-13	-21
187	34	-18	-27	29	-11	-19	227	+56	46	51	41	27	33
188	47	-21	34	-24	-16	-19	228	+68	39	+54	-22	-21	-22
189	-23	-19	-21	-17	25	-21	229	+63	++112	++87	+71	+79	+76
190	-23	30	-27	-17	26	-22	230	++72	++89	++80	+71	+67	+69
191	33	29	31	41	38	39	231	++88	++139	++112	++86	++90	++88
192	+50	39	45	40	26	32	232	++113	++126	++120	++85	+80	++82
193	-25	25	-25	-21	-11	-16	233	35	-20	28	-18	-16	-17
194	-18	-22	-20	-18	-9	-13	234	42	-11	-27	-15	-9	-11
195	30	38	34	-26	-19	-22	235	39	27	33	29	-17	-22
196	28	-23	-26	-20	-20	-20	236	+54	-20	38	-17	-12	-15
197	29	+58	43	+53	48	50	237	40	41	41	49	35	41
198	33	+57	44	41	27	33	238	+65	+54	+60	+57	36	45
199	++72	++89	++80	+73	++85	+79	239	+66	+61	+63	++92	45	+67
200	+63	+65	+64	50	45	47	240	++87	+59	+73	+69	46	+56

附表1 (続き)

資

料

タイプ	中 学			高 校		
	男子	女子	全 体	男子	女子	全 体
241	30	25	28	-17	-7	-11
242	38	-14	26	-8	-4	-6
243	+68	35	+52	30	-18	-24
244	+64	-18	41	-13	-15	-14
245	35	43	39	33	-22	27
246	38	32	35	28	-21	-24
247	+67	+76	+71	+55	42	48
248	+72	48	+60	52	33	42
249	32	-11	-22	-11	-7	-8
250	34	-13	-24	-9	-8	-8
251	48	-17	32	41	-7	-22
252	43	-10	-27	-17	-9	-13

タイプ	中 学			高 校		
	男子	女子	全 体	男子	女子	全 体
253	-21	-16	-18	-24	-15	-19
254	39	-15	-27	-22	-12	-17
255	+54	31	43	50	27	37
256	+58	36	47	37	-22	29
平均 m	38.5	38.6	39.3	39.6	38.6	39.1
標準偏差 σ	22.0	28.6	24.1	25.4	29.9	25.6

ゴチック体は平均 m より1標準偏差 σ 以上正または負の方向にずれた出現頻度を表わす。

++はその出現頻度 f が: $f \geq m+1.5\sigma$

+は $m+1.5\sigma > f > m+0.5\sigma$,

-は $m-0.5\sigma > f > m-1.5\sigma$

--は $f \leq m-1.5$, および附号のついていないものは $m-0.5\sigma < f < m+0.5\sigma$

であることを示す。

反応パターンの解釈によるパーソナリティ診断の試み(5)

附表 2

10,000人当りの出現頻度の χ^2 検定結果

タイプ	A 中 学			B 高 校			C 中高(全体)			D 中高(通年)		
	男	女	全 体	男	女	全 体	男	女	全 体	男	女	全 体
1	>	>	>		∨							
2		∧		>	<							=
3		∧	∧	∧	<							
4		<		∧	∧			<				=
5	<				∨	∨	<	<	<			
6	<*			<*	∨	∨	<*	<	<			
7				∧	∧	∧	<	<	<			
8	<	<	<	∧	∧	∧	<	<	<			
9					∧							=
10	<				<		<		<			
11	∨			∧						=		=
12												=
13		∧	∧		∨	<		<	<			=
14		∧						<	<			
15		<					<	<	<			
16							<	<	<			
17		<										=
18	∧	<		∧						=	=	=
19		<			∧							=
20	<	∧	∧									
21					∧		<					=
22	<	∨		∨	∨	∨						
23	∧	<	<	∧	∧	∧		<	<			
24	∧						<	<	<			
25										=	=	=
26												=
27				∧	∧	∧	<	<	<			
28	<						<	<	<			
29		∨	∨	>	∨							
30		<	∨	>	<		<					
31	<	∨	<	>	∨		<	<	<			
32	<*	<	<	<*			<*	<	<			
33	∨		∨	∧	∨					=		
34		∧		∧	∧							
35				>	∧							
36	<	∧	∧	>		∧		>				
37		∨			<		<	<	<			
38	<*	∧		<*		<	<*	<	<			
39		∧		>	∧	∧	<		<			
40		∨		<		<	<		<			

附表2 (続き)

資 料

タイプ	A 中 学			B 高 校			C 中高(全体)			D 中高(通年)		
	男	女	全 体	男	女	全 体	男	女	全 体	男	女	全 体
41												=
42		^								=		=
43				v	^		<					
44	^	^	^									
45				^				<				
46	^			v	v	v			<			
47	<		<	^	v		<	<	<			
48	v	v		<		^	<					
49										=	=	=
50		^					>					
51	v	<										=
52		v		v		v						=
53	v			^							=	=
54				v	^							=
55	^	<	<	<	^							
56	v	^	^	<	v	v						
57		>		^			>					
58					v	v				=		
59					v					=		
60		>		^							=	=
61		v								=		=
62	^	^	^								=	=
63							<		<		=	=
64	^	^	^	<	^						=	=
65				<	^							=
66				v	<	<						
67	^	^	^	>								
68	v			^	^	^	<				=	
69	v			v			<	<	<			
70	v										=	=
71	v			>	^						=	=
72										=	=	=
73	v										=	=
74				>	v	v						=
75					<	<				=		=
76										=		=
77				^	^	^						
78		<	<							=		=
79	<		<	>		v		<	<			
80		v		^						=	=	=

反応パターンの解釈によるパーソナリティ診断の試み(5)

附表2(続き)

タイプ	A 中 学			B 高 校			C 中高(全体)			D 中高(通年)		
	男	女	全 体	男	女	全 体	男	女	全 体	男	女	全 体
81		^			^		>		>			
82					<		>		>			
83							>	>	>			
84				>	^		>		>			
85				^								=
86		>					>					
87		<		^	>	^						
88				^		^						
89		<			>							=
90					^	^	>					=
91								<		=	=	=
92				v							=	=
93				v	^						=	=
94	^			^							=	=
95	v	<	<	v			<	<	<	=		
96					<			<	<			
97					v	v	>	>	>	=		
98											=	=
99												
100		^					>	>	>			
101	v		v								=	
102					^							=
103					^	^		>		=		=
104					v			>				=
105				^							=	=
106				^	v		>				=	=
107	v	^		^		^		>			=	=
108							>					=
109	v	>	^									=
110		v		^	v				<			=
111				<			<		<	=	=	=
112												=
113		>			v		>		>			
114	^	>	^	v	v		>	>	>			
115	^	^	^		v		>	>	>			
116							>	>	>			
117				<							=	
118		v						>				
119	^		^	>				>			=	
120						<	>		>			=

附表2 (続き)

資 料

タイプ	A 中 学			B 高 校			C 中高(全体)			D 中高(通年)		
	男	女	全 体	男	女	全 体	男	女	全 体	男	女	全 体
121		>		>				>	>			
122	>				∨		>		>			
123				∨							=	=
124				∧						=	=	=
125		<		∧						=	=	=
126	∨		>	∨							=	=
127	∧			∨	>	∨						
128	<	<	<									
129				>	∧	>		<				
130					<							
131	<				∧							=
132	∨			∨							=	=
133		∨		∨	<		<	<	<			
134	∨	∨	∨	∨	∧		<	<	<			
135	∨			∨	∨		<	<	<			
136	∧			∧			<	<	<			
137	∨	∨	∨								=	=
138										=	=	=
139	∨						<				=	=
140				<							=	=
141				<	∧							
142		∨		∨	∧		<		<			
143					∧							
144		<		∧				<	<			
145				∨						=	=	=
146	∨										=	=
147		∧			∧		>				=	=
148					>		>					=
149		∨			<		<	<				
150					∧					=		=
151	∧			<		∧						=
152	∧			<							=	=
153		∨			<					=		=
154	∨									=		=
155		<								=		=
156		<		∨								=
157	<	<	<	∨	<	<	<				=	=
158	<	<	<	∨	<	<	<					
159	>			∧		∧	<	<				
160		<					<	<	<			

反応パターンの解釈によるパーソナリティ診断の試み(5)

附表2(続き)

タイプ	A 中 学			B 高 校			C 中高(全体)			D 中高(通年)		
	男	女	全 体	男	女	全 体	男	女	全 体	男	女	全 体
161										=		=
162	>		>	<								
163		>			∨					=		=
164		∨		∨			>		>			
165				<			<				=	
166		>			<	<	<					
167				∧	>		<					=
168		∧						>		=		=
169					>					=		=
170				<							=	=
171	>			>							=	=
172		∧		<			>					
173				∨		∨	<	<	<			
174		>		<								=
175	∧	∨			>							=
176				<	>		<					=
177	∨	∧			∨					=		=
178				>	∧		>		>			
179		<		>			>	>	>			
180				∧	>	>		>				
181					∨			>		=		=
182				<	∨	<						
183	∧	<		>		>					=	
184							>		>			
185				>	>	>					=	=
186				∨	∧						=	=
187					<					=		=
188				∨			>		>		=	=
189					>					=	=	=
190		>			>					=	=	=
191				∨						=	=	=
192					∨					=	=	=
193	>	∧		<		<	>					
194				∨	∧			>				
195				∨	∧			>				
196	>										=	
197	>						<				=	=
198		>			∨			>		=	=	=
199										=	=	=
200		<										

附表2 (続き)

資 料

タイプ	A 中 学			B 高 校			C 中高(全体)			D 中高(通年)		
	男	女	全 体	男	女	全 体	男	女	全 体	男	女	全 体
201		∨			>					=		=
202	>		>	∨		∨					=	
203	>	>	>									
204				∨	∧		>	>	>			
205		∨			∨	∨						
206					∨	∨						
207	∨	∧					<					=
208				∧			<				=	=
209		>		∨	∨	∨	>		>			
210	∧				>		>	>	>			
211	>		>				>	>	>			
212	∧	<	∧	∨			>		>			
213		>	∨	>								
214		<								=		=
215					>	>						=
216	∨	<		∨								=
217	>		>	∨	∨	∨	>					
218	>						>				=	
219				∨		∨					=	
220		>		∨	>							=
221		>		<						=		=
222					∧					=		=
223		<			∨			<		=		=
224	<	∨	<	∨					<			=
225	∧			∨							=	=
226	∧											
227		>		∧	∧	∧		>	>			
228							>	>	>			
229		>	>	∨				>				
230				<	∨	<						=
231		∧		>	∨			>				
232		∧		<			>	>	>			
233	>	∨	∨		∧		>					
234	>			∧			>		>		=	
235	>		>	<							=	
236	>		>				>		>		=	
237				∨		∨						
238		>	>		∨					=	=	
239				∧			<				=	=
240	∧	∨		<								=

反応パターンの解釈によるパーソナリティ診断の試み(5)

附表2 (続き)

タイプ	A 中 学			B 高 校			C 中高(全体)			D 中高(通年)		
	男	女	全 体	男	女	全 体	男	女	全 体	男	女	全 体
241		^		>	^			>	>			
242		^		>	^		>	>	>			
243		>		<	v	<	>	>	>			
244					v	v	>		>			
245		>	>	^	v	v		>		=		
246				^	>	>						
247	<	^						>	>			
248		^										
249				>			>		>		=	
250	*>	>	>	*>	v	v	*>		>			
251				v	v	v		>		=		
252					>		>		>			
253				>	>	>						
254	^						>				=	
255		<		v	>	v						
256				>	>	>	>		>			

A欄は中学, B欄は高校の出現頻度の学年間 χ^2 検定(自由度2)結果で, 不等号>は, その出現頻度が1年 \geq 2年 \leq 3年, <は1年 \leq 2年 \leq 3年, ^は1年<2年>3年, vは1年>2年<3年であり, 5%以下の危険率で χ^2 検定(自由度1)の結果に有意差のあることを示す。

C欄は, 中学高校間の出現頻度の χ^2 検定結果で, 不等号>はその出現頻度が中学>高校, <は中学<高校であり, χ^2 検定結果に5%以下の危険率で有意差のあることを示す。

D欄は中学, 高校の6学年間の出現頻度の χ^2 検定(自由度6)結果で, =は5%以下の危険率で, 学年間に出現頻度の差のないことを示す。

*は中学, 高校の6学年を通して出現頻度に一貫した発達傾向がうかがえることを示す。